



TITLE:

京大広報 No. 662

AUTHOR(S):

京都大学総務部広報課

CITATION:

京都大学総務部広報課. 京大広報 No. 662. 京大広報 2010, 662: 3313-3334

ISSUE DATE:

2010-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196420>

RIGHT:



京大広報

No. 662

2010.12



第5回京都大学ホームカミングデイ
—関連記事 本文3320ページ—

目次

京都大学の新たな発展のために 財務・施設担当理事・副学長 西阪 昇	3314
〈大学の動き〉	
京都大学次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」(平成22年度募集分)次世代研究者育成センター採用者を内定	3316
「近畿ブロック大学等安全保障貿易管理説明会／京都大学安全保障輸出管理説明会」を開催	3319
第5回京都大学ホームカミングデイを開催	3320
西島安則元総長お別れの会を举行	3321
キヤノン・京都大学学術交流奨学金寄附目録贈呈式を举行	3321
平成23年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施	3322
〈寸言〉	
こだわりとグローバル 福島 伸一	3323
〈随想〉	
土壌と肥料—ことばの歴史をたどる 名誉教授 久馬 一剛	3324
〈洛書〉	
創造的であるために、思いを伝えるために 小木曾 哲	3325

〈栄誉〉	
山中伸弥 iPS 細胞研究所長が文化功労者に選ばれる	3326
鍋島陽一名誉教授が紫綬褒章を受章	
西田栄介生命科学研究科教授が紫綬褒章を受章、武田医学賞を受賞	3326
〈話題〉	
原子炉実験所「アトムサイエンスフェア2010」を開催	3328
AEARU(東アジア研究型大学協会) 「16 th Annual General Meeting」および 「27 th Board of Directors Meeting」の開催	3328
学術情報メディアセンターセミナー「阿修羅の顔とキティの顔—顔学からその秘密を探る—」を開催	3329
宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催	3330
原子炉実験所公開シンポジウムを開催	3330
経営管理大学院がシンポジウム 「第3回サービス・イノベーション 国際シンポジウム」を開催	3331
〈グローバル COE プログラム紹介〉	
アジア・メガシティの人間安全保障工学拠点	3332

京都大学総務部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

京都大学の新たな発展のために

財務・施設担当理事・副学長 西阪 昇

平成22年8月1日付けで、大西珠枝理事の後を受けて、理事・副学長に就任いたしました。当初は、財務・広報担当でしたが、10月1日からの新体制では、財務・施設を担当しております。

私は、昭和54年に、本学法学部を卒業し、文部省(当時)に入省以来、文部科学行政の各分野を幅広く担当するとともに、滋賀県教育委員会、内閣官房、観光庁に出向して参りました。このたび、31年ぶりに母校に戻り、その運営の一端を担うことになり、大変うれしく思っております。私を育てていただいた母校への恩返しとして、これまでの経験、知識を生かし、京都大学のより一層の発展のために全力を尽くしていきたいと思っております。

現下の大学を取り巻く状況は大変厳しいものがありますが、ピンチの後にチャンスあり、この逆風を工夫と努力で乗り越えた後には、大学の新たな発展が待っていると信じております。そういう観点から、私が現在担当する財務・施設面を中心に、これからの取組の方向について考えを述べさせていただきます。

1 大学の財務体質の強化

法人化後、国立大学を巡る状況は大変厳しいものがあり、特に、これからの数年は、財務的にはこれまで以上の厳しい状況が続くことが予想されます。そのような中、大学のアクティビティを衰えさせることなく、より発展させていくためには、徹底的な無駄の排除、予算の有効配分、資金・資産の効率的運用をはじめ、既存組織や各種システムの見直しを行い、財務体質をより筋肉質にすることが不可欠です。ただ、縮減、見直しばかりでは、気分や姿勢も萎縮し、新たな発展は望めません。それと同時に、新たな発想により、また、民間的経営センスも持って大学運営に当たり、新たな外部資金の導入など多



様な財源の獲得・創出を図っていくことも、財務担当理事の大きな仕事だと考えております。

この点では、研究担当理事、渉外担当理事、産官学連携本部長等と一緒に、「新たな財源獲得・創出」連絡調整会議を設け、検討、対応を開始したところです。

民間的発想からすれば、大学には大変魅力的な資産がたくさんあります。「国立大学」という制度上、運用上の制約はありますが、それら眠っている資産をうまく活用することで新たな財源が確保されることもあると思います。民間とも連携し、このような新たな取組にも積極的に対応していきたいと考えております。

2 愛着と誇りを持てるキャンパスづくり

キャンパスの施設・環境は、大学の顔と言うべきものであり、大学の持つ歴史・風格を体現するとともに京都大学らしさが随所に感じられるものにしていく必要があると考えております。

そのため、大学の将来構想を踏まえたキャンパスマスタープランを作成し、その長期的ビジョンに立って、毎年の施設整備、個々のキャンパスづくりを行っていく必要があります。また、これからの施設整備に当たっては、省エネ、CO₂対策等環境配慮が不可欠です。

3万人近い学生や教職員が、それぞれの活動を行いながら日々の大半を過ごす大学は、一つの町とも言えるべきであり、その本来の活動の場である講義室、研究・実験室など教育研究スペースの整備充実はも

ちろんのこと、レストラン等の飲食スペースや仲間と語らう場、さらには、スポーツ施設や芸術文化施設も充実させ、より快適に一日を過ごすことができるキャンパスにしていく必要があると思います。今後のスポーツや芸術文化施設の整備に当たっては、民間と連携して、プロの方の利用も考慮したグレードの高いものにし、一般利用も積極的に進めるとともに、その一級施設で学生諸君にパフォーマンスしてもらえるようにすることも検討課題ではないかと思っています。

また、これら今後の施設整備に当たっては、なにより学生、教職員等ユーザーの意向を反映したものにしていきたいと思っており、ユーザーの皆様の声をお聞きする方策も検討していきたいと考えます。

大学の有している様々な施設・資産は、学外の方には大変魅力的なものが多いと思います。一般の方々に京都大学の活動をより知っていただき、親しく感じていただくためにも、施設、資産の一般への公開を積極的に進めていきたいと考えています。

そこに過ごす人たちにとって、愛着と誇りを持っていただけるキャンパス、学外の方からは、あこがれを持って見ていただける大学づくりを施設・環境のハード面からも実現していきたいと思っています。

3 隔地施設は大学の宝

京都大学には多くの隔地施設があります[※]。これだけ多くの各種施設を全国に有している大学は、全国でも数少ないのではないかと思います。これら隔地施設は規模の大小はありますが、研究の拠点として、また、学生のフィールド学習の場として、大変質の高い活動をされており。

また、都会では考えられない不便な交通・生活環境の中でも、多くの所員の方に頑張ってもらっています。

これら隔地施設は、本部キャンパスでは実施できない教育研究の実践の場であるとともに、全国の方々に京都大学の存在をより知っていただくという

点で、大変貴重な存在です。

施設整備等どうしても後回しになりがちですが、隔地施設を京都大学の全国での情報発信の拠点としてより活用していく観点からも、その充実を図っていくことを検討していきたいと思っております。

4 京都大学らしさ

法人化後、各国立大学では様々に大学改革に取り組んでおり、中には、これまでは考えられなかったような斬新な取組も進められています。東京大学に次ぎ、二番目の帝国大学として設置されて以来、今日まで、国内はもとより、世界的にも高い評価を得て確固たる地位を築いてきた本学ですが、それに安住して安穩としていると、あっという間に他大学に後れをとるということも考えられます。人、モノ、カネ、情報の東京集中が進む中、全国に、さらには世界に、これまで以上に本学の存在感を積極的に示していく努力をしていく必要があります。

その際、何と言っても、京都大学の伝統、魅力である「自由の学風」を大切にしつつ、世界に発信、貢献できる「独創的研究」が進められることが重要だと思います。

他大学の取組を充分に参考にしつつ、その後追いをするのではなく、京都大学発のまさに「自由」で「独創的」な新しい発想による様々な大学改革の取組を進め、京都大学を世界の中でキラリと光る、一層魅力ある大学になるよう、教職員、学生の皆様と力を合わせて取り組んでいきたいと思っております。厳しい状況の中ではありますが、顔をしかめることなく、しっかりと前を向いて、諸課題に取り組んでいきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

※『京大広報』2007年1月号(No.619)から2009年12月号(No.651)まで掲載していました「隔地施設紹介」シリーズを一冊にまとめ、『地に根づき、未知に挑む－京都大学隔地施設紹介』を2010年11月に刊行しました。

<http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/issue/kakuchi/index.htm>

大学の動き

京都大学次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」(平成22年度募集分) 次世代研究者育成センター採用者を内定

9月24日(金)、次世代研究者育成センターは、運営委員会を開催し、次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」(平成22年度募集分)に係る次世代研究者育成センターの採用内定者を決定した。

白眉プロジェクトは、松本 紘総長の発案で昨年度より開始した事業であり、次世代研究者育成センターにおいて、毎年度20名を上限に優秀な若手研究者を5年任期の年俸制特定教員(准教授・助教)として採用し、ひたすら研究に専念させることにより、次世代を担う先見的な研究者を育成するものである。対象分野は、人文学・社会科学・自然科学の全分野であり、博士の学位を有する者又はこれと同等の能力を有する者であれば、年齢に関係なく応募することができる。

今年度の応募については、4月23日(金)に公募を開始し、6月24日(木)の公募締切までに、国内・国外合わせて517件の応募があり、これらを次世代研究者育成センター専門委員会による書類選考、次世代研究者育成センター伯楽会議による面接、次世代研究者育成センター運営委員会における審議を経て、19名の内定を行った。

応募・採択状況、内定者については以下の通りである。

【応募・採択状況】

応募者数	内定者数	倍率
517名	19名	27.2倍

	応募者数	比率	内定者数	比率
男性・女性比率	421名：96名	81.4%：18.6%	17名：2名	89.5%：10.5%
文系・理系比率	141名：376名	27.3%：72.7%	6名：13名	31.6%：68.4%
学内・学外比率	183名：334名	35.4%：64.6%	10名：9名	52.6%：47.4%
国内・国外比率	411名：106名	79.5%：20.5%	16名：3名	84.2%：15.8%
准教授・助教比率	167名：350名	32.3%：67.7%	7名：12名	36.8%：63.2%
平均年齢(准教授)			33.0歳	
(助教)			29.7歳	

※主に本人の提案書記載の内容から分類

【採用内定者(准教授)】



氏 名：Asli M. Colpan
(アスリ チョルパン)
現 職：京都大学経営管理大学
院みずほ証券寄附講座
准教授
専門分野：経営戦略・企業統治



氏 名：今村 博臣
(いまむら ひろみ)
現 職：大阪大学産業科学研究
所科学技術振興機構さ
きがけ研究者
専門分野：生物物理学



氏 名：今吉 格
(いまよし いたる)
現 職：京都大学ウイルス研究
所科学技術振興機構さ
きがけ研究者
専門分野：神経発生学・神経科学



氏 名：江波 進一
(えなみ しんいち)
現 職：カリフォルニア工科大学
博士研究員・日本学術
振興会海外特別研究員
専門分野：物理化学・大気環境化
学



氏 名：Simon CREAK
(サイモン クリーク)
現 職：オーストラリア国立大
学研究員
専門分野：東南アジア史学



氏 名：長尾 透
(ながお とおる)
現 職：愛媛大学大学院理工学
研究科助教
専門分野：天文学

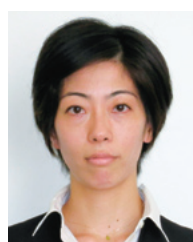


氏 名：山崎 正幸
(やまさき まさゆき)
現 職：ケンブリッジ大学医学
研究所リサーチアソシ
エート
専門分野：構造生物学

【採用内定者(助教)】



氏 名：赤木 剛士
(あかぎ たかし)
現 職：京都大学大学院農学研
究科農学専攻博士課程
3年・日本学術振興会
特別研究員(DC2)
専門分野：園芸学(果樹園芸学)



氏 名：大串 素雅子
(おおぐし すがこ)
現 職：理化学研究所基礎科学
特別研究員
専門分野：生殖生物学



氏 名：岸本 展
(きしもと のぶ)
現 職：京都大学大学院理学研究科日本学術振興会特別研究員(PD)
専門分野：数学(偏微分方程式)



氏 名：熊谷 誠慈
(くまがい せいじ)
現 職：京都大学人文科学研究科日本学術振興会特別研究員(PD)
専門分野：仏教学・チベット学



氏 名：小林 努
(こばやし つとむ)
現 職：東京大学大学院理学系研究科附属ビッグバン宇宙国際研究センター特任研究員
専門分野：宇宙論・一般相対論



氏 名：沙川 貴大
(さがわ たかひろ)
現 職：東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程3年
専門分野：物理学



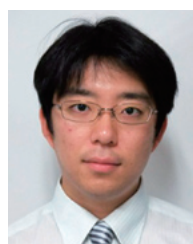
氏 名：佐藤 拓哉
(さとう たくや)
現 職：京都大学フィールド科学教育研究センター日本学術振興会特別研究員(SPD)
専門分野：生態学



氏 名：西出 俊
(にしで しゅん)
現 職：京都大学大学院情報学研究科技術補佐員
専門分野：認知発達ロボティクス



氏 名：西村 周浩
(にしむら かねひろ)
現 職：京都大学大学院文学研究科日本学術振興会特別研究員(PD)
専門分野：言語学



氏 名：信川 正順
(のぶかわ まさよし)
現 職：京都大学大学院理学研究科博士後期課程3年・日本学術振興会特別研究員(DC1)
専門分野：高エネルギー宇宙物理学

氏 名：村田 陽平
(むらた ようへい)
現 職：名古屋大学大学院環境学研究科日本学術振興会特別研究員(PD)
専門分野：人文地理学



氏 名：森 靖夫
(もり やすお)
現 職：京都大学大学院法学研究科日本学術振興会特別研究員(PD)
専門分野：日本政治外交史

(研究推進部)

「近畿ブロック大学等安全保障貿易管理説明会／京都大学安全保障輸出管理説明会」を開催

10月29日(金)、本学は経済産業省とともに、「近畿ブロック大学等安全保障貿易管理説明会／京都大学安全保障輸出管理説明会」を芝蘭会館稲盛ホールにて開催した。本説明会は、近年大学等においても一層の留意が求められている安全保障貿易管理について、学内外の教職員等に基本的な知識を持っていただくことを目的として、本学における安全保障輸出管理の体制や最新の状況についての説明会と、経済産業省が全国地域ブロック単位で開催している説明会とを合わせて開催したものである。

説明会の前半では、吉川 潔理事・副学長からの開会挨拶に続き、村越正毅経済産業省貿易経済協力局安全保障検査官室長から、「安全保障貿易管理に



開会の挨拶をする吉川理事

ついて」と題して制度概要の説明があった。また、伊藤正実特定非営利活動法人産学連携学会会長・群馬大学共同研究イノベーションセンター教授(兼)知的財産戦略室長から、「産学連携学会が策定した大学向け安全保障貿易管理ガイドライン」と題して大学等研究機関で起こりうる事例や対応等についての講演をいただいた。

後半は、研究推進部研究推進課から、本学の安全保障輸出管理体制についての説明を行うとともに、事例に基づくケーススタディを産官学連携本部と部

局の事例経験者から紹介した。

当日は、本学教職員のほか、全国の大学等から約180名の参加者があり、制度概要並びに大学において注意すべき点をわかりやすくまとめたパンフレットも併せて配付されたほか、活発な質疑応答や、閉会後も多くの情報交換が行われるなど、有意義な説明会となった。

安全保障貿易管理(安全保障輸出管理)とは：

日本を含む国際的な平和および安全の維持を目的として、武器や軍事転用可能な物・技術を核兵器等の大量破壊兵器の開発を行っている国やテロリスト集団の手に渡さないようにするための法制度である。規制の対象となっている物の輸出、技術の提供等を行うには、経済産業大臣の許可が必要で、無許可で輸出・提供すると、法律に基づき刑事罰や行政制裁が科されることがある。

大学においては、研究機材や化学物質、微生物等の輸出(海外渡航時の持出し)、海外の政府や企業が関係する受託研究や共同研究、海外企業への技術指導、海外からの研究員や留学生の受入れ、研究過程における海外研究者とのデータや資料の交換等が、外国為替および外国貿易法(外為法)に基づく安全保障貿易管理上の規制対象となり、経済産業省への許可申請が必要となることがあるので注意を要する。

本学においては、本年10月1日付けで研究推進部研究推進課に担当が置かれ、学内からの相談等に対応しており、平成23年1月には規程等を施行予定である。

安全保障輸出管理についての問合せ先：

研究推進部研究推進課(安全保障輸出管理担当)

TEL：内線(本部) 2297・2298

E-mail: info-yusyutu@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp



説明会場の様子

(研究推進部)

第5回京都大学ホームカミングデイを開催

11月13日(土)、百周年時計台記念館を中心として「第5回京都大学ホームカミングデイ」を開催し、主催者企画には同窓生(卒業生、元教職員等)、教職員、学生など延べ約1800名の参加があった。

同窓会全体会は百周年記念ホールにおいて開催し、同窓会会長である松本 紘総長の挨拶の後、同窓会役員代表として佐藤晃一愛媛同窓会会長、洪鍾泌韓国総同窓会会長およびTa Thanh Vanベトナム人同窓会会長からそれぞれ挨拶が行われた。



挨拶する松本総長

次に森 純一国際交流推進機構長から「京都大学の国際戦略－競争と協調を巡って」と題する記念講演があり、続いて京都大学マンドリンオーケストラ60名による「琵琶湖周航の歌」などの記念演奏が行われた。今年度から、記念演奏会、記念講演会などを一般の方にも開放し、例年以上の参加があった。

記念演奏会終了後の懇親会は国際交流ホールに会場を移し、松本総長の挨拶、同窓会顧問の沢田敏男元総長による乾杯の発声で開宴となった。今回のホームカミングデイも海外からのOB・OG、そして文化系・体育系クラブをはじめとする多くの学生の参加があり、学生サークルTREVISによりチアリーダーが披露され、会場が華やかに盛り上がった。



大抽選会の様子

また、今回初めて実施した大抽選会では、当選された同窓生および学生それぞれ二人に松本総長から記念品が手渡され、会場は大きな拍手の渦に包まれた。最後に応援団OBの浦崎章吉氏、笹倉聖司氏のリードにより、参加者全員が肩を組み、第一応援歌「新生の息吹」を合唱。例年以上の盛り上がりの中、参加者の交流を深め、盛況のうちに閉会となった。



「新生の息吹」の合唱

懇親会終了後、百周年記念ホールにおいて、2008年にノーベル物理学賞を受賞された小林 誠日本学術振興会理事により「素粒子今昔」と題する講演が行われた。



小林氏による講演

この他、国際交流ホールにおいて昨年大好評だった「OB・OGと学部学生・大学院学生との交流会」を開催し、若手卒業生と現役学生が就職をテーマとして熱心に意見

交換を行った。また、総合博物館においては、本学附属図書館が所蔵する坂本龍馬や武市半平太の書状や絵画を公開する「龍馬と半平太の手紙」と題した特別展が開催され、多数の入館者で賑わった。他には、清風荘見学や北部キャンパスツアーに多くの参加者があった。

もう一つ、今年の特色として、いくつかの学部学科等の同窓会および地域同窓会がこの日のホームカミングデイに合わせてイベントや同窓会を開催した。中でも、京機会(機械系同窓会)が主催した川口淳一郎宇宙航空研究開発機構教授による「はやぶさ7年の旅」と題する、小惑星イトカワの探査を行った「はやぶさ」についての講演は、同窓生以外の一般の方にも開放され、大盛況となった。この他、百周年時計台記念館とリニューアルされた楽友会館においても学部学科等同窓会や地域同窓会が講演会等を開催し、賑やかな一日となった。

次回は、平成23年11月12日(土)に開催を予定。同窓生のみならず、教職員、学生や家族の方々の参加を期待している。

(企画部)

西島安則元総長お別れの会を挙行政

11月28日(日)、去る9月3日に逝去された京都大学第21代総長西島安則先生のお別れの会を、京都市との共催で京都市立芸術大学講堂において挙行政した。

まず、西島先生の略歴等の紹介後、参列者全員の黙祷により先生のご冥福をお祈りした。



追悼の言葉を述べる松本総長

続いて、発起人である門川大作京都市長並びに松本 紘総長より追悼の言葉が述べられた。松本総長は、西島先生の研究者としての業績を紹介するとともに、本学総長在任中に導入された大学入試センター試験に関わる様々なご苦労や総長退任後の多分野にわたるご活躍に触れ、この度のご逝去は我が国にとって大きな損失であり残念でならないと述べられた。

次に、西島先生が平成10年4月から6年間京都市立芸術大学長を務められていた際、うち5年間を副

学長として苦楽をともにされた上村 淳京都市立芸術大学名誉教授、並びに西島先生が本学工学部高分子化学科高分子構造講座の担当のときに後任として講座を担当された山本雅英本学名誉教授によるお別れの言葉があった。

先生のお人柄が忍ばれる言葉が続いた後、京都市立芸術大学音楽学部の方々による献奏が行われ、厳粛な中にも西島先生を想う穏やかな空気が流れるひとときとなった。

最後に、ご遺族を代表して西島 昭氏より挨拶があり、その後参列者による献花で会が閉められた。

少し雨がぱらつく肌寒い日であったが、西島先生のご人徳をうかがわせるような大変多くの参列者があった。



参列者による献花

(総務部)

キヤノン・京都大学学術交流奨学金寄附目録贈呈式を挙行政

キヤノン株式会社から京都大学学術交流奨学金へ寄附をいただくことになり、12月1日(水)、その目録贈呈式ならびに記者会見を京都大学東京オフィスで行った。

キヤノン株式会社からは、御手洗富士夫代表取締役会長、内田恒二代表取締役社長、生駒俊明取締役副社長が出席され、京都大学からは、松本 紘総長、塩田浩平理事・副学長、中村孝志副理事・医学部附属病院長が出席した。

まず、松本総長からキヤノン株式会社に対して多

額の寄附について謝辞を述べるとともに、今回の寄附を現在建設中の「先端医療機器開発・臨床研究センター」の建設費用の一部に充当することや国際的な人材育成に活用する旨の挨拶を行った。

また、御手洗会長より、京都大学と「CKプロジェクト(高次生体イメージング先端テクノハブプロジェクト)」を通じてキヤノン株式会社の技術者と京都大学の研究者が一体となって研究開発を行っている経緯や「先端医療機器開発・臨床研究センター」への期待が述べられた。



目録贈呈式の様子

続いて、御手洗会長より松本総長へ目録の贈呈があり、今後両者の間で緊密な連携協力が進むことが期待される贈呈式となった。

牧野圭祐産官学連携本部長、伊藤紳三郎工学研究科教授、平岡眞寛医学研究科教授も加わり記者会見が行われた。冒頭、中村病院長より「先端医療機器開発・臨床研究センター」について、平岡医学研究科教授より「CKプロジェクト」について説明があり、質疑応答に入った。特に現在研究開発が進行中の医療機器について質問が寄せられ、期待の大きさを示す会見となった。



記者会見の様子

(総務部)

平成23年度大学入学者選抜大学入試センター試験の実施

平成23年度大学入学者選抜大学入試センター試験は、平成23年1月15日(土)および16日(日)の両日に実施される。試験の概要は、次のとおりである。

1. 実施期日および試験教科等

1月15日(土)

公民、地理歴史、国語、外国語、英語リスニング

1月16日(日)

理科①、数学①、数学②、理科②、理科③

2. 試験場および志願者数

第1試験場(本部構内)

第2試験場(本部構内)

第3試験場(本部構内)

第4試験場(吉田南構内)

第5試験場(吉田南構内)

志願者数 1,870 人

なお、平成23年度の西日本地区の追試験は、本学が追試験実施大学となり、平成23年1月22日(土)および23日(日)の両日に、吉田南構内追試験場において実施される。

(学生部)

寸言

こだわりとグローバル

福島 伸一



私は長崎市の出身です。長崎から大学へ進学するには、地元九州の大学か、もしくは東京の大学に進学するのが定番です。しかし、なぜか私は行ったこともない古都京都にあこがれ、京都大学に入学しました。学生時代には、良き友に恵まれ青春を謳歌し、社会人になるまでにエネルギーを蓄える素晴らしい4年間となりました。

私は大学卒業後、松下電器産業株式会社(現パナソニック株式会社)に入社し、主に人事・労務畑で過ごし、2009年に副社長になりました。その間、サラリーマン人生の中で、最も記憶に残る出来事がありました。それは、20世紀のエクセレントカンパニーといわれた松下電器が、2001年に創業以来初の大赤字になった時のことです。「経営理念以外にタブーはなし」という当時の中村社長のもと、グループを挙げての経営改革と構造改革を進めていくプロセスのなかで、上司・同僚・仲間と苦労を共にしながら感じたことですが、それは「企業は社会の公器」ということです。企業はいかにお客様に支えられているか、お客様あつての企業ということを強く感じた次第です。そして、変革に必要なものは、企業トップのリーダーシップはもちろんのこと、社員一人ひとりが会社を思い、危機感を持ち、企業を変えていこうとする思いです。そのエネルギーとパワーを肌で感じながら、自分自身も当事者として携わることに生きがいを感じました。

学生時代の私は、正直にいうとあまり勉強するタイプではありませんでした。夜な夜な京都の街を徘徊するような学生でした。振り返ると、京都大学の自由でおおらかな校風のなかで教授や友と語らううちに、未知なるものに遭遇した時に問題解決する能力を自然に学ぶことができたのだと思います。それが、社会に出てからも自分のバックボーンになったと強く感じております。

私が直感(?)に導かれてやってきた京都とは、い

かなるところか。ある人にお聞きしたはなしですが、京都人によりますと、「戦後というのは、応仁の乱後」のことだそうです。強いこだわりの精神を感じずにはいられません。また、京都の企業は本社を東京に移さない、その理由は世界を相手にするグローバルな組織であるからだと思います。私が感じる京都を一言でいいますと、「こだわりとグローバル」です。

京都大学とは、まさにその精神を反映した「グローバルに存在価値のある」大学であり、今後もそうあり続けて欲しいと思います。京都にある意義とは何か。東京・ニューヨーク・北京のような、その国の中心地にあるわけではありませんが、見据えているのは常にグローバルな世界。そして、あくなき探究心で真理を追究する強いこだわり精神。これからも、益々輝いて欲しいと願っております。

昨年の6月に、私は関西国際空港株式会社の社長に就任しました。空港は日本の、また、世界の人達が行きかうワクワクするプラットフォームです。関空は、4,000m級複数滑走路を持ち、完全24時間運用可能で、自然環境の保全に配慮した海上空港です。「安全・安心」と「お客様第一主義」を追求しながら、世界中のお客様に愛される空港づくりに挑戦し、アジアと関西、そして日本のゲートウェイ(玄関口)として、関西と日本の成長と発展に貢献することが私の願いです。

最後に学生の皆さんへのメッセージとして、社会に出てから求められるのは、問題解決能力です。もちろん職階によりテーマは変わりますが、問題に直面した時にいかに懐深く解決できるかが重要です。この能力が高い人こそ、真にグローバルな人材であると思いますし、社会や企業も求めています。

学生時代は、机の上での勉強だけでなく、自分の好きなことに取り組み、外に目を向けて視野を広げることが重要です。人格形成する人生の多感な時期にどれだけ養分を吸収し、社会に出た時に必要なエネルギーを貯め込むことができるか。勉強でもスポーツでも何かに打ち込むもよし、とにかく好きなことに取り組むのがよいと思います。

(ふくしま しんいち 関西国際空港株式会社代表取締役社長 昭和46年法学部卒業)

随想

土壌と肥料—ことばの歴史をたどる

名誉教授 久馬 一剛

近頃、松本 紘総長の式辞の中には、京大を「衍沃な土壌」にしたいとお言葉が何回も見られ、土壌学を専門としてきた筆者には、大いに「わが意を得たり」という思いがある。



ところで、この植物生育の培地としての土を指す「土壌」という言葉は、わが国では何時ごろから使われるようになったのだろうか。多くの人は、史記の中の有名な「太山不讓土壤故能成其大」をご存知であろうから、二千年以上も昔からあった言葉であり、わが国でも中国文化の渡来以降ずっと使われてきたに違いないと思っておられるだろう。しかし事實はさにあらず、江戸時代にあれだけ多くの農書が書かれたにもかかわらず、「土壌」は全くといっていいくらい使われていない。

明治になって内務省勸業寮に農業博物館が置かれたとき、展示すべきものとして「肥糞の見本…耕作すべき土の見本」が挙げられているが、「土」一字では納まりが悪かったせいか、その後公文書で「土」を指す言葉としてまず使われたのが「地質」であり、やがて「地質」が現在の用法で定着すると、「土質」が使われるようになる。

明治8年に東京新宿に農事修学場、同9年に札幌農学校が設置されて本格的な農学教育が始まった。明治10年イギリス人教師らが来日し農事修学場で講義を始めたとき、その講義目の中に「土壌の元始及天質」が見え、これがわが国の公文書に土壌という言葉が現れた最初の事例であると思われる。その後しばらくは「土質」と「土壌」が混用されたが、およそ明治15年頃からは「土壌」が定着したかに見える。「土質」の方は、土木的な施工の対象としての土という言葉として、今も「土質力学」のように使われている。

それにしても何故わが国の農書で「土壌」が使われなかったのか、その理由はよくわからない。

わが国では土の肥培に用いる資材を、古くから「こやし」という倭言葉で呼び、江戸期の農書などではそれに「糞」、「糞培」、「糞苴」などの漢字を当ててきた。これらの漢語はもともと中国農書に由来すると思われる。林蒲田*によると、中国における古来の「糞」の使い方から、それは人の生み出す廃物の総称であって、人畜の糞尿、食物の残滓、草木灰などあらゆるものを含むという。彼は中国の古代には「肥料」という名詞はなく、それを「糞」で表し、「肥」は土地の肥瘦をいう場合にのみ使われてきたとしている。ようやく1903年になって江西地方の農書中に初めて「肥料」という言葉が現れ、それを最初に採録した中国の辞典は、1915年に出版された《辞源》と《中華大字典》であったという。上にも述べたように、わが国でも「肥料」という言葉は明治になるまでは使われていない。明治のごく初めには、上にも出てきた「肥糞」や「肥養」なども使われたが、明治9(1876)年の勸業寮第一回年報の中で、すでに「肥料」は現在の意味で使われており、すぐに術語として定着した。中国に先んずることほぼ30年、「地質」や「土壌」に先駆けて公用術語としての市民権を得た模様である。

現在の中国の学術用語の多くは日本でつくられたものだというから、上の「肥料」ももとは日本から輸出された言葉だったのかも知れない。明治の初年に生きた人たちは、横文字を何とか漢字に置き換えようとして努力し、その成果が漢字圏全体に共通する資産となった。逆に、現在は国際化の要請からであろうが、大学でも英語で講義をすることが多くなってきているし、場合によっては推奨されてもいる。やがては総長の式辞も英語になって、「衍沃な土壌」が“Vast Fertile Soil”となるのだろうか。

* 林蒲田 1996. 「中国古代土壤分類和土地利用」 科学出版社、北京。

(きゅうま かずたけ 平成6年退職 元農学部教授、専門は土壌学)

洛書

創造的であるために、思いを伝えるために

小木曾 哲

私は、全学共通科目で地球科学の講義や実験を担当している。科学や基礎研究への風当たりが強い世間の雰囲気の中、できるだけ科学の面白さを伝えようと、授業の中では地球科学の基礎的な知識に加



えて、研究の最先端の熱い話題を紹介するようにしている。しかし、己の努力が足りないせいか、学生のレポートを読むたびに、なかなか自分の思ったようには伝わらないな、と感じることが多い。

そんな日々の中、あるドキュメンタリー映像を見た。それは、エレファントカシマシというロックバンドの音楽制作過程を追った「扉の向こう」という作品である。このドキュメンタリーでは、バンドのボーカリスト宮本浩次を中心に、メンバーとスタッフ達が1つのアルバムを完成させるまでの日々が描かれている。

この中で描かれている宮本の姿が凄まじい。頭をかきむしり、書き散らしたノートの断片を拾い上げ、言葉を書いては消し、消してはまた書いて、歌詞を作っていく。38度の熱があろうと声を振り絞り、歌詞が完成していない曲でさえ全力で歌い、バンドメンバーを怒鳴りつけながら、納得のいく音が出るまでひたすら演奏し続ける。このようにして宮本は、己の持てる力をすべて出し尽くしながら、アルバムに入れる曲を作り上げていく。

彼の目指すところは、自分で納得のいく曲を作り出すことだけではない。映像の中で、宮本と音楽ディレクターが、「注目された方がいいよね?」「どう考えてもいいでしょ、ポップカルチャーだから」「やっぱり売りたいよね…」と言葉を交わすシーンがある。そう、メジャーレーベルからCDを出す限りは、商業的な成功を目指さなくてはならない。「売れる」作

品を作り出していかなければならないのだ。

エレファントカシマシは、デビュー当初から数年間、あまり世間に注目されることがなかった。そして、ついにはレコード会社から契約を打ち切られる事態に陥ってしまう。そんな中でも宮本は、「絶対に売れてやる!」と、鼻息荒く曲を作っていたという。その創作意欲は、決して「注目されたい」「成功したい」という世俗的な野心から出ていたのではない。「自分の曲をたくさんの人に聴いてほしい」「自分の思いを多くの人に伝えたい」という、音楽制作者としての真摯な思いが彼をつき動かしていたのである。

このドキュメンタリーを見て、納得のいく曲を作りそれを多くの人に届けるために持てる力のすべてを出し尽くす、その凄まじいまでの誠実な姿に衝撃を受けた。音楽制作とはこれほどまでに凄絶な作業なのかと、愕然とする思いであった。

翻って地球科学者としての自分はどうか。音楽と地球科学、一見何の共通点もないように思えるが、常に独創的で創造的な仕事を求められる、という点において、また、成果(作品)を人々に伝えていくことを生業としている、という点において、地球科学のみならず多くの学問分野が、音楽あるいは芸術全般と本質的な部分を共有していると思う。そういう意味で、我々は宮本と同じ土俵の上にいる、ということも良い。

では、日々の自分の姿は、宮本の姿と比べてどうであろうか。自分は、独創的で創造的な研究をするために、どれほどの力を振り絞ってきたのか?そしてその成果を人々に伝えるために、どれほど真摯な努力をしてきたのだろうか?

「役に立つ研究」だとか「説明責任」だとか「研究資金獲得」だとか「2位じゃダメなんですか」だとか、そんな言葉を気にする以前に、もっと集中すべきことがあるのではないのか?「扉の向こう」からそう問いかけられている気がした。

(こぎそ てつ 人間・環境学研究科准教授、専門は岩石学、地球化学)

栄誉

山中伸弥 iPS 細胞研究所長が文化功労者に選ばれる

このたび、山中伸弥iPS細胞研究所長が平成22年度文化功労者に選ばれ、11月4日(木)に東京都内で顕彰式が行われた。

山中伸弥iPS細胞研究所長(物質-細胞統合システム拠点教授)は、昭和62年3月神戸大学医学部を卒業、国立大阪病院臨床研修医を経て、平成5年3月大阪市立大学大学院医学研究科博士課程を修了した。平成5年4月、グラッドストーン研究所にポストドク研究員として留学し、トランスジェニック・マウスを用いた遺伝子機能解析を行った。帰国後、平成8年10月に大阪市立大学医学部薬理学教室に戻り、同11年12月に奈良先端科学技術大学院大学遺伝子教育研究センター助教授に就任した。この時、初めて自身の研究室を主宰し、体細胞を初期化しES細胞に類似した多能性幹細胞を樹立することを研究テーマに掲げた。平成15年9月、同教授となるが、同16年10月京都大学に移り、再生医科学研究所再生誘導研究分野教授に就任した。平成18年8月に世界で初めてマウスiPS細胞(人工多能性幹細胞)の樹立成功を発表、同19年11月にヒトiPS細胞を樹立したと報告した。平成20年1月物質-細胞統合システム拠点iPS細胞研究センター長を併任し、現在は、物質-細胞統合



システム拠点教授で、本年4月に設立されたiPS細胞研究所長を務めている。

今回、文化功労者に選ばれた理由は、iPS細胞を誘導する技術を世界に先駆けて開発し、幹細胞分野の研究に多大な影響を与えたことによる。同教授の研究グループは、線維芽細胞に4因子(Oct3/4, Klf4, Sox2, c-Myc)をレトロウイルスベクターを用いて導入し、ES細胞に似たほぼ無限に増殖する能力と、様々な体の細胞を作り出す多能性を有する幹細胞を作製した。この技術は、病態モデルの作製、薬の有効性、副作用、毒性試験のための研究ツールとして、新薬や新治療法の開発に大きく貢献する可能性を持つと考えられている。同教授のグループは、将来の再生医療応用を見据え、安全で、効率的なiPS細胞の樹立方法や作製されたiPS細胞の安全性の評価系の確立に向けて、世界をリードする基礎研究を行っている。

このように幹細胞研究にとどまらず、医学研究の発展に大きく貢献したことが評価され、平成20年紫綬褒章、同21年アルバート・ラスカー基礎医学研究賞、本年には恩賜賞・日本学士院賞および京都賞を受賞している。このたび、文化功労者として顕彰されたことは誠に喜ばしいことである。

(iPS細胞研究所)

鍋島陽一名誉教授が紫綬褒章を受章

西田栄介生命科学研究所教授が紫綬褒章を受章、武田医学賞を受賞

このたび、わが国学術の向上発展のため顕著な功績を挙げたことにより、鍋島陽一名誉教授、西田栄介生命科学研究所教授が11月3日(水)に紫綬褒章を受章されました。また、西田教授は武田医学賞を受賞され、11月12日(金)に授賞式が行われました。以下に両氏の略歴、業績等を紹介します。

鍋島陽一名誉教授は、昭和47年新潟大学医学部を卒業、同51年同大学大学院医学研究科博士課程を修了し、医学博士の学位を授与された。同大学医学部助手、講師、財団法人癌研究会癌



研究所研究員、主任研究員を経て、昭和62年11月厚生省国立精神・神経センター神経研究所遺伝子工学研究部長に就任された。次いで、大阪大学細胞生体工学センター教授を経て、平成10年京都大学大学院医学研究科教授に就任し、腫瘍生物学講座を担当された。この間、分子病理学教育を担当され、また、

医学研究科では多くの大学院生の研究を指導された。さらに、日本学術会議第20期、21期会員、医学研究科附属ゲノム医学センター長、生命科学系キャリアパス形成ユニット長を務め、我が国の研究、教育の発展、若手研究者の育成に尽力された。平成22年3月に定年退職し、京都大学名誉教授の称号を授与された。本学退職後は、先端医療振興財団先端医療センター長に就任され、今日に至っている。

同名誉教授の研究業績は多岐に及ぶが、(1)単一遺伝子より複数の遺伝子産物が合成される仕組みとしてAlternative splicing機構を発見した研究、(2)筋細胞特異的遺伝子発現の制御、Myogenin遺伝子破壊マウスの解析による筋細胞の分化制御、増殖因子による筋細胞の増殖と分化の制御、メルトリンによる筋細胞の融合、骨髄間質細胞から筋細胞を効率よく誘導するシステムの開発など、筋細胞制御の遺伝子プログラムの研究、(3)シナプス形成、神経突起伸展、神経細胞の移動、神経細胞の運命決定など、中枢神

経系の発生、形成を制御する遺伝子プログラムの研究、(4)一個の母細胞から二個の異なる娘細胞を生み出す非対称分裂、生殖幹細胞ニッチ、未分化精原細胞が幹細胞へと逆戻りする現象など、幹細胞制御の分子機構の研究、(5)a-Klotho, b-Klothoの発見とその生理的機能、分子機能の解析を基盤とした動物個体の恒常性を維持する遺伝子プログラムの研究の5つに大別され、全体として「動物個体の発生、形成、機能維持の分子機構の解明」に大きく貢献された。

これらの一連の業績は高く評価され、岡本国際賞(2009年)、文部科学大臣表彰科学技術賞「研究部門」(2009年)、武田医学賞(2007年)、上原賞(2005年)、ベルツ賞(共同受賞)(1998年)、朝日学術奨励金(1987年)を受賞されており、さらに、このたび、紫綬褒章を受章されたことは誠に喜ばしいことである。

(大学院医学研究科)

西田栄介教授は、昭和51年東京大学理学部を卒業後、同大学大学院理学系研究科に進学、同56年理学博士の学位を授与された。昭和56年4月日本学術振興会奨励研究員、同年6月東京大学理学部助手、平成5年京都大学ウイルス研究所教授、同9年同大学大学院理学研究科教授を経て、同11年同大学大学院生命科学系研究科教授に就任し、同17年4月から同21年3月まで生命科学研究科長を務められ、現在に至っている。



同教授は、永年にわたって、生化学・細胞生物学の教育、研究に努め、生化学・細胞生物学の発展に貢献されてきた。同教授の最も顕著な業績は、MAPキナーゼ並びに関連シグナル伝達の分子機構に関する研究である。MAPキナーゼは、真核生物に普遍的に存在し、細胞の増殖・分化および発生、さらには

高次生命機能に必須の役割を担っているタンパク質リン酸化酵素である。同教授は、世界に先駆けてMAPキナーゼシグナル伝達経路を発見し、ヒトを含む高等脊椎動物におけるMAPキナーゼ経路の多彩な機能とその精妙な制御機構を明らかにされた。さらに、細胞の増殖・分化および発生の諸過程を制御する多様な細胞内シグナル伝達、また寿命制御を含む高次生命機能を制御するシグナル伝達について、それらの分子機構を明らかにされている。

これらの一連の業績が高く評価され、平成13年度には日産科学賞、同14年度井上学術賞、同15年度大阪科学賞、同21年度上原賞を受賞されており、さらにこの度、紫綬褒章の受章ならびに武田医学賞の受賞をされたことは誠に喜ばしいことである。

(大学院生命科学研究科)

話題

原子炉実験所「アトムサイエンスフェア2010」を開催

原子炉実験所では、10月24日(日)に「アトムサイエンスフェア2010」を開催した。

このイベントは、小学生以上を対象とした実験教室で、平成14年度の開始以来9回目となり、好評を博している。今回も前回と同様に若手の教職員等が中心となって策定した二つの実験コーナー「飛行機雲をつくろう」、「太陽電池を作ろう」と体験コーナー「光を曲げる」、「コップの中の虹を見てみよう」、「DNAを見てみよう」、「放射線検知器で宝探し」、「ビーズのストラップ作成・ぬりえ等」を設け、参加者を三つの班(アトム、ウラン、コバルト)に分けて、実験コーナーと体験コーナーを順次交替して、楽しんでもらえるようにした。



体験コーナーの様子

当日は、60名(付添者を除く)の参加があった。小学生を中心とする参加者は、それぞれのコーナーで目を輝かせて実験に取り組み、驚きの体験をして歓声を上げ、熱心に質問するなど、未来の科学者が目に浮かぶ姿も見受けられた。

参加者がすべてのコーナーを一巡した後、実行委員長からすべての参加者一人一人に「アトムサイエンス博士」の修了証が手渡され、大盛況のうちに実験教室を終了することができた。

主催者としては、このような機会を通して科学に関心を持つ方が青少年層を中心に少しでも増えることを期待している。



修了式の様子

(原子炉実験所)

AEARU(東アジア研究型大学協会)「16th Annual General Meeting」および「27th Board of Directors Meeting」の開催

10月27日(水)・28日(木)の二日間、本学が加盟する「The Association of East Asian Research Universities(AEARU)」の第16回年次総会および第27回理事会が中国・清華大学の主催で、北京市内のホテルおよび清華大学キャンパスにおいて開催された。日本6校、中国5校、韓国3校、台湾2校、香港1校の計17の研究型大学から、学長・副学長を中心に約60名の参加があった。



理事会で発言する森副理事

本学からは、森 純一 副理事(国際交流推進機構長)、戸倉照雄国際部長および国際部職員3名が出席した。議長校である香港科技大学のTony F. CHAN学長の議事進行の下、27日午後開催の理事会では、2011年のAEARU理事会・総会の日程およびAEARU事業・財政計画について審議された。翌

28日の年次総会では、本年度の事業報告と次年度の事業計画等について議論されるとともに、本学が2011年度AEARU総会および第1回AEARU漢字シンポジウムを開催することを提案し、2011年12月14日～16日の日程で本学にて開催することが決定された。



AEARU第16回年次総会の様子

(国際部)

学術情報メディアセンターセミナー「阿修羅の顔とキティの顔ー顔学からその秘密を探るー」を開催

10月27日(水)、学術情報メディアセンターでは、原島 博東京大学名誉教授・日本顔学会会長を招き、セミナー「阿修羅の顔とキティの顔ー顔学からその秘密を探るー」を開催した。原島氏は、工学的観点から顔に興味を持ち「顔学」を提唱。東京大学では、文理にまたがる横断型の教育研究組織である大学院情報学環の設立に関わられた。

興福寺の阿修羅像は、普通の仏像より小さい。興福寺の阿修羅像は、日本人を表現しているのではない。阿修羅像は3つの顔を持っているが、それぞれの顔表情も違う。反抗的な幼児の表情、心の葛藤を持つ青年の表情、正面の大人の表情。阿修羅像は、ひとりの少年の



阿修羅像(ウィキペディアより引用)
http://commons.wikimedia.org/wiki/File:ASURA_detail_Kohfukuji.JPG

成長を現しているのではない。また、顔の上半分を見ると陰悪な印象であるが、下半分を見ると穏やかな印象に変わってしまうのである。原島氏はこれらの顔の変化について、自らの過ちの否定から受容までの心境の変化を表現していると解釈された。

次に、キティはカワイイ「グッズキャラ」の代表である。カワイイ顔とは顔は横長で、目鼻立ちは下の方に寄り、目は離れており、口はおちょぼ口か無い。表情を動きで表す「アニメ顔」とは違い、グッズキャラ

は形が感情移入しやすいように出来ているという。例えばキティは、時代と共に顔が大きくなっているが、顔を大きくすることでより親しみやすいキャラクターへと変化していったものと思われる。人間は初対面では外見が人の印象を左右するのに対し、親しみがわくと顔の印象が大きくなるという。現代のキティは、母親が幼児に買うグッズキャラから、女子高生が自分のために買うグッズキャラへ変化したと考えられる。



ハローキティ(c)株式会社サンリオより引用
<http://www.sanrio.co.jp/>

子高生が自分のために買うグッズキャラへ変化したと考えられる。

阿修羅像とキティの共通点とは、無表情ならぬ無限表情にあるという。これは能面にも見られるもので、阿修羅像は光の当て

方や見る角度によって表情が様々に変化する。一方、キティも口が無いので、見方によって泣いていたり笑っていたり様々に解釈することができる。また、顔というのは単独ではなく、人と人との関係の中で初めて意味をなすのであって、それを見ている人の心を映すものである。顔はイメージであり、見る側のイメージによって解釈が変わってくる。原島氏は、人と良いコミュニケーションを築いていくことが、良い顔と良い人生を創るだろうと結ばれた。



原島氏による講演の様子

(学術情報メディアセンター)

宇治キャンパスで安全衛生講習会を開催

宇治キャンパスでは、11月11日(木)に宇治事業場衛生委員会主催による安全衛生講習会を開催した。

この講習会は、宇治地区の教職員や大学院生等を対象に、「年間安全衛生管理計画」の一環として開催しているものである。今回は神戸市代表監査委員の桜井誠一氏を講師に迎え、「私の体験的危機管理～阪神・淡路大震災と新型インフルエンザの事例から～」と題して講演いただいた。

桜井氏は、1995年阪神・淡路大震災時に神戸市長室広報課長を、2009年新型インフルエンザ第1号が神戸で確認された際には神戸市保健福祉局長を務められており、その貴重な危機管理体験に基づいて講演された。同氏による「過去の危機体験を生かし、行動をイメージトレーニングしておくことで、危機

に強くなれる」「危機にあたって、一歩踏み出す勇気」というメッセージに参加者は熱心に耳を傾けていた。

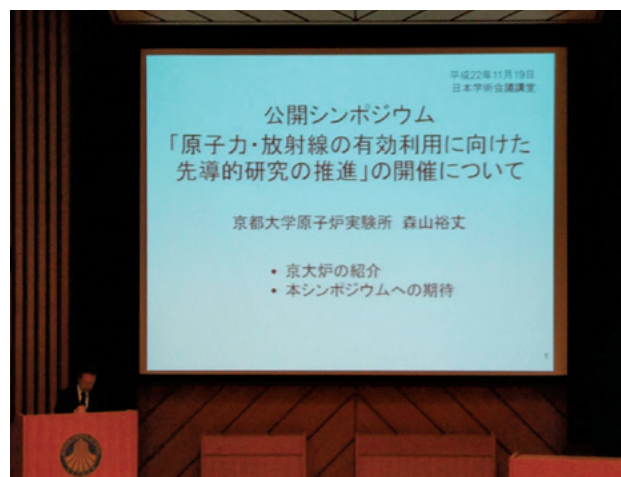


阪神・淡路大震災の経験を語る桜井氏

(宇治地区事務部)

原子炉実験所公開シンポジウムを開催

原子炉実験所では、11月19日(金)、日本学術会議講堂にて「原子力・放射線の有効利用に向けた先導的研究の推進」と題した公開シンポジウムを、日本学術会議総合工学委員会およびエネルギーと科学技術に関する分科会との共催で開催した。



森山所長による開催の挨拶

シンポジウムでは、森山裕文所長の挨拶に始まり、矢川元基日本学術会議総合工学委員会委員長および森田正信文部科学省研究振興局学術機関課長から挨拶の後、代表的な研究者から「原子力基礎科学分野」「粒子線物質科学分野」「放射線生命医科学分野」の講演があった。引き続き、「共同利用研究」「人材育成、社会連携」に関して関係機関の方々、特に社会連携については、地元熊取町の中西 誠町長から講演いただいた。最後の総合討論では、特に人材育成に関して活発な意見交換が行われた。

参加者は、原子力関係機関の方をはじめ一般の方まで総勢180名に達し、大学の研究者を中心に推進されている原子炉実験所大型研究計画のさらなる推進と発展に向けて大変有意義なものとなった。

(原子炉実験所)

経営管理大学院がシンポジウム「第3回サービス・イノベーション国際シンポジウム」を開催

11月13日(土)、経営管理大学院は京都市北文化会館において、経済産業省委託事業「産業技術人材育成支援事業(サービス工学人材分野)」プログラムの一環として、「第3回サービス・イノベーション国際シンポジウム」を開催した。現在、国の経済成長戦略としてのサービス国際化が必須であり、サービス産業の国際展開(アウトバウンド事業)だけでなく、海外からの訪問者に対する事業展開(インバウンド事業)も重要な施策となっている。このような重要課題であるサービスの国際化に関して政府・産業界・学界から第一人者を招き、ディスカッションを行った。

冒頭、小林潔司院長から、本年4月開設のサービス価値創造プログラムの紹介と本シンポジウムの開催趣旨を説明した後、大隈隆史経済産業省サービス政策課課長補佐から挨拶があった。



溝畑長官による基調講演

基調講演では、本大学院特命教授でもある溝畑 宏観光庁長官が、「観光立国・サービス立国への道-Japan Endless Discovery-オールジャパンで日本を元気にしよう!」とのタイトルで、具体的な観光誘客(インバウンド)や観光振興策の実際を紹介した。

講演Iでは、Jukka Pajarinenフィンランド大使館一等書記官から「フィンランドの観光産業の将来」と題して、豊かな大自然、オーロラ、サンタクロース、ムーミンなど、フィンランドの観光資源や国を挙げた取り組みについての紹介があった。

続く講演IIでは本大学院特別教授でもある碓井 誠フューチャーアーキテクト株式会社シニアフェロー



溝畑長官(左)と京都観光アイデアコンテスト受賞者

が、コンビニの雄、セブンイレブンを主な題材として、「流通イノベーションの広がり」とグローバル展開(アウトバウンド)」を論じた。

また、「京都観光アイデアコンテスト」※の表彰式を執り行い、受賞した4名の学生には、溝畑長官から賞状と記念品が贈られた。



パネルディスカッションの様子

後半のパネル討論では、日本、韓国、シンガポールからサービス科学研究の最前線を担う4人のパネリスト(木嶋恭一東京工業大学大学院教授、高木英明筑波大学大学院教授、Lee Ji-Hwan韓国科学技術院教授、Caroline Limシンガポール経営大学高度サービス研究所ディレクター)を招いた。「国際的視点のサービスと科学」をテーマに提起された論点には、感性品質、サービス人材育成、プロセス・イノベーション、顧客満足度指数などがあり、コーディネーターである原 良憲教授・経営研究センター長がディスカッションをリードした。

結びとして日置弘一郎教授から、サービスの幅広い枠組みから本質に迫るといった試みも含めて、サービス価値創造プログラムとしての意思表示が行われた。

本シンポジウムへは、多種多様な産業・学術分野から大勢の参加者が集まり、そのほとんどの方がプログラムを通して熱心に聴講された。参加者からは、サービスの「科学」や「グローバル化」という視点が斬新であったなど、好評を博した。

※「京都観光アイデアコンテスト」とは、溝畑長官が「サービス産業論」の授業中に発案。応募資格は経営管理大学院の学生で個人によるもの。応募総数約50件から、最優秀賞、エキサイティング賞、ディスカバリー賞、特別賞を選定した。

(経営管理大学院)

グローバル COE プログラム紹介



プログラム名称：アジア・メガシティの人間安全保障工学拠点

拠点リーダー：工学研究科教授 松岡 譲

申請分野：機械・土木・建築・その他工学 **研究分野：**土木工学

申請部局：工学研究科，地球環境学堂，防災研究所

概要

京都大学大学院工学研究科の地球工学科系および建築学のグループ，地球環境学堂および防災研究所は，平成20年度から「アジア・メガシティの人間安全保障工学拠点」のテーマでグローバル・センター・オブ・エクセレンス・プログラム (G-COE) を実施しております。アジアのメガシティでは，ベーシック・ヒューマン・ニーズ，環境汚染，災害とそれらに対する自立的な対応能力

をいかに確保するかが大問題となっておりますが，過去数十年間の改善状況は失敗の歴史でした。都市の膨張が急激に起こってきたこともあります，さらに重要なことは，そうしたリスクに対応する技術，制度の整備がバラバラに行われてきたこと，さらに技術や制度を取り入れても，それをマネージするコミュニティや人材の整備に関心が払われて来なかったためであります。このような認識に立ち，このプログラムでは，土木工学・建築学・



図1 人間安全保障工学を構成する主要な要素

環境工学・防災学をベースとしながらも、徹底した現場主義に基づき、工学技術、都市経営管理および制度づくりの相補的な共進化の促進に力を注ぐことによって、これまで築いてきた要素的な学問を、人間安全保障の確保に向け都市の管理戦略や政策策定を含む総合的な学問に脱皮させ、それに基づいた教育・研究拠点の確立を目指しています。

活動の紹介

これまで行ってきた活動を大別すると、以下の5点になります。

1) 博士課程教育プログラム「人間安全保障工学」分野

都市の人間安全保障工学を支えるコア領域と4つの学問領域(都市ガバナンス、都市基盤マネジメント、健康リスク管理、災害リスク管理)について、複数領域に跨がって確実な素養を獲得させ、それらを都市の人間安全保障確保に向け目的に応じて統合化し適用する能力と、その技法を深化・進展しうる能力を持った研究者および高度な技術者の養成を行っています。米田 稔教授(工学研究科都市環境工学専攻)が分野長となり、19のクラス科目と2つのORT科目を英語で開講しています。ORT科目の目玉は、長期海外インターンシップで、2ヶ月以上の期間、現場での問題解決能力、国際性や人的ネットワークの涵養に努めさせています。また、留学生の志願を容易にするため、海外入試実施や文部科学省奨学生優先配置枠獲得などの工夫も行っています。現在、約100名の学生が在籍しています。

2) 都市の人間安全保障工学教育・研究センター(HSEセンター)の開設・運営

都市の人間安全保障工学教育・研究センター(HSEセンター)を桂キャンパスC1棟エントランス横に設置しました。平山修久准教授、吉田 護

助教およびG-COE特定事務補佐員2名の方々が常駐しています。このセンターは、博士教育プログラムの運営を行うほか、後述する海外拠点のハブオフィスとしての役割も担っております。また、遠隔会議システムを駆使し、毎週、若手研究者会議、拠点連絡会議等を行い、教育・研究活動の進行状況、海外拠点運営状況などを確認し、事業推進者や共同研究者らによる各種活動のバックアップを行っています。

3) 海外拠点の設置・展開

アジア諸国に7つの海外拠点を展開し、緊密な国際研究・教育ネットワークの構築・運営を行っています。7拠点とは、中国・深圳(拠点長：田中宏明教授、工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター)、ベトナム・ハノイ(拠点長：藤井滋穂教授、地球環境学堂)、タイ・バンコク(拠点長：大津宏康教授、工学研究科都市社会工学専攻)、シンガポール(拠点長：谷口栄一教授、工学研究科都市社会工学専攻)、インドネシア・バンドン(拠点長：松岡俊文教授、工学研究科社会基盤工学専攻)、インド・ムンバイ(拠点長：多々納裕一教授、防災研究所)、マレーシア・クアラルンプール(拠点長：清水芳久教授、工学研究科附属流域圏総合環境質研究センター)です。これらの拠点には、G-COE特定教員あるいはポスドク研究員の方々に常駐していただき、教育、特に長期海外インターンシップのバックアップや国際共同研究プロジェクトの中心的役割を担っていただいています。

4) 共同研究プロジェクトの推進

都市ガバナンス(領域リーダー：門内輝行教授、工学研究科建築学専攻)、都市基盤マネジメント(領域リーダー：大津宏康教授)、健康リスク管理(領域リーダー：田中宏明教授)および災害リスク管理(領域リーダー：多々納裕一教授)の4領域を中心に、上述した海外拠点等をプラットフォームとする共同研究プロジェクトを推進しております。



図2 プログラム「アジア・メガシティの人間安全保障工学拠点」でアジア各都市に展開している海外拠点

毎年、およそ50本以上の国際共同研究プロジェクトを実施し、それらに加え若手研究者育成を目的とした十数本の若手・萌芽研究プロジェクトを行っています。

5) 関連シンポジウム・ワークショップの実施や報告書シリーズの刊行

海外拠点での共同研究、博士課程教育プログラム等の経験をベースに、平成21年度までに94件の国際・国内シンポジウムの実施、99巻からなる報告書作成、8巻の英文テキストの刊行を行い、「人間安全保障工学」の国際的展開に向けての人的ネットワークの確立、相互連携を図ってきました。ニューズレターやホームページ(<http://hse.gcoe.kyoto-u.ac.jp/>)を使い、こうした活動の広報・宣伝などにも努めております。

今後の活動に向けて

以上のように、これまでの2年半については、事業推進担当者や教育・研究担当者の皆様方のご支援に支えられ、どうにか乗り切ってきました。

しかるに、プロジェクトの目標である「アジア地域における人間安全保障の確保に向け、これまで築いてきた工学技術を道具としながらも、徹底した現場主義の洗礼を受けさせることによって、都市の管理戦略や政策策定を含む総合的な学問に脱皮させ、それに基づいた教育・研究を行う世界的拠点を確立する」ことに対しては、工夫しなければならぬ点も残っています。

現在、大学における教育・研究のグローバル化への潮流には、極めて強いものがあります。そうした中で、本G-COEのような、グローバルではあるものの現場の多様性を本質的に取り込もうとする試みが、大学本来の役割である知的創造の営みの中心部まで入り込めるか、そうした営みに必須のものとなりうるかは、グローバル化の波にどのように付き合うのかといった皮相的な観点からのみならず、地球工学、建築学の将来にとって本質的かつ死活的な課題であると考えております。引き続き、一層のご指導とご鞭撻を期待してやみません。

(工学研究科教授 松岡 譲)